【論文】

ある女性記者・田路百合の生涯

The Life of TAJI Yuri, a Female Reporter

井川　充雄†

はじめに

田路百合（たじゆり）。おそらくこの名前に心当たりのある方は，ほとんどいないであろう。日本のメディア史上，決して有名な人物ではない。そこで、まず、私自身がこの人物に興味を持つきっかけとなった一つの新聞記事から説明したい。

詳細は後述するが、前著『帝国をつなぐ〈声〉』（井川 2022）のもととなった論文で、日本統治下の台湾におけるラジオ放送を調べているときに、この名前に行き当たった。すなわち、1937年7月の盧溝橋事件後、台湾放送協会では、海外放送の実施に踏み切るが、その際、日本語放送のみならず、福建語、北京語、広東語、安南語、馬来（マレー）語などとともに英語によるニュースを放送した。これらは、台湾島外、とりわけ対岸の中国大陸へ向けてのものであった（井川 2019）。その英語ニュースを担当していた女性アナウンサーを紹介する記事の中に、田路百合の名が出てきたのである（『台湾日日新報』1938年1月9日）。

この記事を読んだ際、日本統治下の台湾で、英語に堪能なこの女性がどういう人物で、またその後どういう人生を歩んだかに興味を引かれた。国立国会図書館デジタルコレクションで検索をかけてみると、『映画ストーリー』という雑誌の2つの記事がヒットした（田路 1958, 1959）が、年代が大きくはなれており、また「在パリ」と記されていることもあり、同一人物であるか確信が持てなかった。

『帝国をつなぐ〈声〉』を上梓した後、あらためて、台湾放送協会の関係者のその後の足跡をたどってみることとした。すると、この数年の間の国立国会図書館デジタルコレクションの拡充にも助けられ、いろいろなことが判明してきた。

いろいろと新聞や雑誌の記事を収集するなかで、1971年6月3日の*Japan Times*に、百合がYurie Tajiの名でファッションについて執筆した記事が見つかった。この中に彼女の経歴についてまとまった記述がなされているので、まずこれを以下に引用する。

†立教大学社会学部教授　m-ikawa@rikkyo.ac.jp

田路百合は、17歳の時に、戦前の*Japan Times*に加わり、18歳で女性欄の編集者となる。20歳で結婚のため、ジャーナリズムを退き、それからの20年間を、上海、インドシナ、ヨーロッパなど、海外で過ごした。1950年にPANA通信社のパリ特派員としてジャーナリズムに復帰。1952 ～ 58年に読売新聞特派員を務めるかたわら、隔月で*Japan Times*に寄稿。1958年から産経新聞の特派員、1961年に帰国。1962 ～ 64年に*The East Magazine*の副編集長。最近9年間は国際会議の通訳をし、サイマルインターナショナルにシニア・アソシエイトとして勤務。夫は、IBM取締役のロバート・Y・ホリグチ。(*Japan Times* 1971年6月3日。原文は英語)

ここには台湾での経歴は記されていない。しかし、そこに掲載されている写真は、年数は経っているものの、紛れもなく前述の『台湾日日新報』1938年1月9日に掲載されている人物と同一であった。つまり、1937 ～ 38年に台湾で英語によるプロパガンダ放送に従事していた人物が、20年を経てフランスのパリに現れたのである。

その後、いろいろと調べていく中で、田路百合と親戚関係にある秋山光文氏(目黒区芸術文化振興財団理事長)、田路百合の孫にあたるオリビエ・ファーブル(Olivier Fabre)氏(元・ロイター通信記者)からも重要な情報を得ることができた。特にファーブル氏は、彼女が生前記した『田路百合自伝』(未刊行資料)を提供してくださったが、これは、第1部日本編、第2部上海編、第3部フランス編からなり、あわせて英文でA4判150ページを超える大部なものである。ただ、ファーブル氏によると、『自伝』とは言いつつも、明らかに誤った記載が少なくなく、また内容を劇的にするようなフィクションの部分も含まれているとのことである。

そこで本稿は、『自伝』も参考にしつつ、当時の新聞記事や雑誌記事等なども使いながら、第二次世界大戦期とその後の激動の時代、海外で活躍した女性が数少なかった時期に、時代に翻弄されながらも生き抜いた一人の人物の軌跡をたどろうとするものである。

なお、ここまで、名前を「田路百合」と表記してきたが、彼女の本名は「田路百合子」である。また、新聞や雑誌に寄稿した際には、「田路ユリ」という名前を用いているし、英文の際は前述のように”Yurie Taji”と記している。ファーブル氏によると、生前、彼女は、「私はもう子どもじゃないから百合子じゃないのよ」と言っていたそうである。ただしすでに10代のことから彼女は、「百合子」ではなく、「百合」と自分のことを読んでいたようである。また、”Yurie”は、ローマ字式の読み方では、「ユリエ」となるが、これで「ユリ」と読んでいた。これらは、後でも述べるように、彼女の育った環境によるところが大きいようである。そこで、本稿でも、表題を含め、「田路百合」と表記することとしたい。

1　生い立ち

田路百合が生まれたのは、1920年2月6日のことである。父は担(やすし)、母はイギリス人のRuby Thomasであった。父の担については、その死後、以下のような記事が雑誌に掲載されている。

故正員田路担君の略歴

君は明治二十一年東京で生れ、日本中学校、第一高等学校を経て東京帝国大学工科大学造船科を卒業せられた。幼にして穎利、学業優秀にして、善行無欠勤等の賞与賞牌をうけたる事数ふるに遑なく、東京帝国大学在学中も常に特待生となり、選ばれて海軍造船学生に採用せられ、明治四十四年七月大学卒業と同時に海軍造船中技士に任ぜられ、呉海軍工廠に赴任したが、抜擢せられ英国に留学し、倫敦大学、緑威大学を抜群の成績を以て卒業し、直ちに大使館附武官として当時戦争中の英吉利艦隊に乗艦して戦時勤務に服し、帰朝後は艦政本部、横須賀海軍工廠等に在って軍艦の計画に当り、天稟の材能と習熟せる技術とを以て二十余隻の軍艦の計画に従事せられた。又大正十一年の華府軍縮会議に於ては専門委員として尽力せられた。同年末官を辞して三菱造船会社に入り同社の代表社員として英国に駐在し、船舶航空機等の機材の購入、監督、検査に従事し、屡々欧州大陸諸工場へも往復せられた。昭和五年病気の為め同社を辞職し、爾来内外の工業雑誌に寄稿し、日本の工業を世界に認識せしむる上に於て多大の貢献をせられ、又日本ニッケル時報局の編輯長にも就任せられた。〔以下略――引用者〕（日本船舶海洋工学会 1940：119）

このように、担は東京帝国大学工科大学や留学先のロンドン大学、グリニッジ大学で造船を学び、海軍で軍艦の建艦に従事したテクノクラートである。退官後は三菱造船に入社した。防衛省防衛研究所には、「大正３年　外国駐在員報告」など「田路担」の名前の記載されている資料が多数所蔵されている[1)]。

担が滞在先のイギリスで出会った女性がRubyであった。彼女の父親は娘が東洋人と結婚することには反対であり、当時の日本大使館からも反対されたという。当時は、国際結婚は極めてめずらしく、また国際法上の手続きが非常に困難であったからであろう（国際結婚の歴史については、竹下 2000、嘉本 2001、嘉本 2008、などを参照）。それでも彼女の意志は固く、2人は結婚し、1919年に日本に帰国した（『自伝』）。そして、生まれたのが百合である。百合には4つ上の兄のJohn（日本名は順）と、2つ下の弟のMarcoがおり、このうちJohnはイギリス生まれであった（Pan-Aisa Newspaper Alliance 1958：361）。

ところで、先に引用した記事のように、担は1922年2月のワシントン海軍軍縮会議にも専門委員として参加したが、それに関連して、興味深い記事を見つけることができた。それは、当時サンフランシスコで発行されていた日本語新聞『日米新聞』（*The Japanese-American News*）の1921年11月7日の紙面で、ワシントンへ向かう途中でサンフランシスコに立ち寄った田路夫妻の様子が掲載されており、夫妻の考え方や生活様式を知ることができる内容である。

両人の仲にはゼームス・ハミルトン・田路（四つ）と田路百合枝（ママ）（二つ）の子供があり随員中の子供として異彩を放ってゐる。可愛らしい此子供達の顔付は全く東洋人だが両親を呼ぶには「マヽ」「パヽ」と呼ぶ。田路夫人は二年半の間に住んだ極東の生活に英国の生活と余り異った処を見出さなかった。それはコスモポリタンの東京に住んだからだと彼女は云ふ。『嫁を迎えた息子が両親と同じ家に棲む事は破る事の出来ない日本の習慣で之が為め嫁と姑との間に面白からぬ事が屡々起ります。私は初めは多少困難な感がしましたが良人が始終私の側に立って呉れましたから円滑に切抜けました』と云ふ〔中略――引用者〕両

人の子供の教育法に就ては既に日英五分五分の協定が出来てゐる、即ち十四五才までは日本の教育を受させ其後英国で学を修めしめると云ふのである(『日米新聞』1921年11月7日)[2)]。

これによれば、田路夫妻は東京でも英国式の生活を崩さなかったようだ。ただ、この記事には大きな疑問がある。引用文の冒頭に、百合(記事では「百合枝」)には2歳違いの兄ゼームスという兄がいたことになる。兄のJohnとは名前も年齢も一致しない。『自伝』にもゼームス(ないしはジェームス)という兄は登場しないし、ファーブル氏も心当たりがないという。記事の単純な誤りなのか、他の理由があるのかはわからない。

記事では、教育については、14 ~ 15歳までは日本の教育を受けさせ、その後は英国で学ばせるとしているが、家庭内では英語が使われていたので百合の母語は英語であった。父の担は日本語の習得を望み、その結果、百合は聖心女子学院に入学することとなった。

学校に最初に行った日、他の児童から「あいのこ」と蔑まれたことを彼女は『自伝』に記している。日本での学校生活になじむのにはかなりの苦労があったようだ。学校での授業は日本語で行われたため、徐々に日本語を習得していった。他方で、修道院(Convent)での活動は英語で行われており、日本に駐在する外交官の子どもらと英語でコミュニケーションすることができた。1936年、16歳で高校の卒業資格を得ると、彼女はオックスフォードへの進学の希望をもっていたが、まずはある大学教授の英文タイプの仕事を得た。その後、ある英字紙(おそらく*Japan Advertiser*)[3)]において外交官をはじめとする著名人の近況などを伝える社交欄を担当するようになり、そうした外交官たちの様々なパーティにも参加するようになった。しかし、そうした新聞社の生活は多忙を極めた。健康を心配した母の勧めにしたがって、百合は1937年6月、台湾に渡ったのである(『自伝』)。

2　台湾放送協会のアナウンサー

「はじめに」でも述べたように、1937年7月7日に盧溝橋事件が勃発すると、台湾放送協会では、海外放送の実施に踏み切った。すなわち、それまでの日本語放送が終了したあとに、福建語、北京語、広東語、安南語、馬来(マレー)語などとともに英語によるニュースを放送したのである(詳細は井川 2022を参照)。そのため、各言語を話すアナウンサーが急遽必要となったのである。

*Japan Advertiser*の1937年8月13日の社交欄(Social and General)には、「田路百合が台湾放送協会JFAKで英語ニュースを担当することになった」旨が掲載されている。同様の記事は、*Japan Times&Mail*の1937年8月14日の社交欄(Social and Personal Notes)にも掲載された。こうした短信が英字紙に載るくらいであるから、すでに百合は、その界隈では有名な人物となっていたのであろう。

台湾放送協会の外国語ニュースに関する新聞記事によると、英語ニュースは鈴木ひで子と田路百合の2人が一日交代で担当した。記事によれば、鈴木ひで子は、トロント大学に留学経験があり、夫は台北高等商業学校に勤務する鈴木源吾であった(『大朝朝日新聞　台湾版』1937年8月8日)[4)]。

そして、その翌年1月の『台湾日日新報』は正月にも働いている女性を取り上げた連載記事を掲載してい

るが、その一つの「職場女性群の正月　降るアメリカ文に　声は濁らじ女アナ」という記事で、田路百合を大きく取り上げている。

> お正月の公園の中は一入淋しい。ただラヂオ塔だけが今し、名曲をガンガンと闇の中にガナリ立てて居る、とそれも止んで今度は、甘ったるいヤング・レディの海外英語ニュースが始った、そうだ彼女達にはお正月がない…とJFAKに飛込んだ夜十一時二十分――グッナイ・エヴリ・ボディ（皆さんお寝みなさい）――と彼女の最後の挨拶が済んで声の主、女アナウンサーのミス・ユリ・タヂがスタヂオから出て来た。
>
> 大きくウエーブした鳶色の毛髪、琥珀の肌、高い鼻、赤い唇、きれいな歯並、黒ダイヤの眼、背丈こそ低いが、ツーピースのフロックもピッタリと板に付いて、何処から受ける感じも吾々日本人よりもあちらの人に近い。『僕、新聞社のものですが』と恐る恐る日本語で刺を通じると『私、田路百合です、どうぞよろしく』と愛嬌良く素晴しい日本語で挨拶されて吃驚したが、考へて見れば彼女は立派な日本人である。

その上で、彼女は現在18歳で、父は三菱の造船技師の担、母はイギリス人のルビーであることや、聖心女子学院を卒業後、ジャパン・アドヴァタイザーの記者をしており、台湾には、その特派員と同時にデル・レの娘に英語を教えるために来たとある。田路には、アフリカのケニアやアメリカのカリフォルニアからもファンレターが来たことがあり、アメリカからのファンレターには、「古今未曾有の美しい英語のラヂオ放送者の一人」と記されていたという。なお、この記事では、北京語放送を担当する林氏玉についても触れているが、二人を比較して、「タヂ嬢が、男のアナ君の二倍位の月給で自動車で送迎され心臓の強いのに比して林氏玉さんは温和しいので、男のアナ君の同情が●然として林氏玉さんに集り玉子チャン、玉チャンで大持てなのも強ちヤキモチばかりではないらしい」と述べ記事を終えている（『台湾日日新報』1938年1月9日。文中の●は判読不能）。

文中のデル・レとはアランデル・デル・レ（Arundel del Re）のことであろう。彼はイタリア人であるが、東京大学を経て、1930年より台北帝国大学で英文学の教鞭を執った人物である（島田 1974：36）。

先の新聞記事を読むと、引用した部分では「大きくウエーブした鳶色の毛髪、琥珀の肌、高い鼻、赤い唇、きれいな歯並、黒ダイヤの眼、背丈こそ低いが、ツーピースのフロックもピッタリと板に付いて、何処から受ける感じも吾々日本人よりもあちらの人に近い」と外見から受ける印象を強調している。さらに、文末では林氏玉と比較しながら、百合は心臓が強く、林氏玉の方が同僚の男性アナウンサーにもてるなどと書いて、百合には皮肉混じりの文章となっている感は否めない。

台湾時代の百合を扱ったものにはもう一つ雑誌記事があるが、これになるとかなり辛辣である。

> 英語ニュースの田路百合子嬢、北投からの御通勤とあって、運転手君、十二時前には家に帰れぬさうな。百合子嬢目下盛んに日本語の御勉強中、日本人が英語を解らぬより日本語を知らぬ方が不便ではあるだらう。（『臺灣公論』1938年3月1日。下線部は原文では傍点。）

英語ニュースは、毎晩11時5分から15分間放送されていたので、その後の帰宅には車が用いられていたのだろうが、そればかりではなく日本語があまりできないことが公然と揶揄されている。

『自伝』にはラジオで英語ニュースを読む仕事は楽しかったと記しているが、これらの記事を見ると、台湾での生活は百合にとって決して居心地の良いものではなかったように思われる。さらに、『自伝』には、地元紙と日本の新聞社の取材を受けたことについても記載している。その中で記者は、「あなたはイギリスと日本のどちらが好きですか」と質問したのである。それに対して彼女は「父と母のどちらが好きかと聞くような質問ですね」と返したが、その答えに満足しない記者に、「子供は一家の長である父を尊敬し、その父を慰めたり、癒やしたりする母を尊敬し、どちらも愛します。しかしより大きな尊敬は父にあります。」と答えたという(『自伝』)。このやりとりは、管見の限り、紙面には掲載されていない。しかし、日本人の父、イギリス人の母をもつ若い女性にとっては、この上なく耐えがたいものであったことは想像に難くない。

3　最初の結婚

1938年3月、母の病状が良くないとの家族からの手紙を受け取った百合は、帰国の途についた。しかし上陸した神戸では、3時間にわたって特高警察の取り調べを受けた。また、東京でも、彼女や家族は、スパイ容疑でたびたび憲兵隊の捜索を受けたという（『自伝』)。もちろん、米英と日本は開戦前ではあったが、国内にいる外国人やその家族は監視の対象となっていたのである。

こうした中、さらなる不幸が彼女を襲った。1939年8月13日には母が療養先の軽井沢で亡くなった(*Japan Times&Mail* 1939年8月16日)[5)]。さらに1940年1月14日には父の担も奉天において死去したのである(『東京朝日新聞』1940年1月25日)。父の葬儀のあとにも、憲兵隊が家を捜索し、百合らを執拗に尋問したという(『自伝』)。

そんな中、百合はBernard Lefeuvre というフランス人男性と知り合う。そして、1940年6月4日には結婚した。出会ってからわずか半年のことだという。

二人が腕を組み幸せそうに見つめ合う写真（写真1）入りで、結婚式を伝える記事が、*Japan Times&Mail*に掲載されている。それによれば、新郎のBernard Lefeuvreは、フランス大使館付きの次席武官（Assistant Military Attache）で、11ヶ月前に来日したばかりであった。記事の最後には、「新郎新婦は、現在、帝国ホテルに滞在しているが、木曜日の午後9:40に東京を離れ、神戸からフランスに出航の予定」と書かれており、新郎の母国へ旅立つことが記載されている（*Japan Times&Mail* 1940年6月6日)[6)]。百合のパスポートの発給にあたっては外務省からの妨害があったものの、父の知り合いの海軍軍人の助力があって事なきを得たという(『自伝』)。ファーブル氏によれば、「要するに、祖母はもう日本にいたく

写真1　新郎のBernard Lefeuvreと新婦の田路百合(*Japan Times&Mail* 1940年6月6日)

なかったので、求婚してくれた外国人と結婚することで出国したかったのでしょう」と語る。

フランスへ向かうために、まず二人は上海へ渡った。このままフランスへと向かうはずであったが、世界情勢の変化は二人にそれを許さなかった。1940年6月30日、ナチスドイツの侵攻によりパリが陥落したため、フランスには戻れなくなったのである。

1941年6月、夫妻は、一度は東京に戻り、8月までの約1ヶ月間を日本で過ごすが(*Japan Times&Advertiser* 1941年6月6日、同6月29日、同8月1日)、その後は、結果として、終戦のあとまで上海に留まることになってしまった。

*Japan Times&Advertiser*には、1941年10月18日、上海で娘Annick Marieが誕生したとの記事がある（*Japan Times&Advertiser* 1941年10月26日）。管見の限り、このあとのLefeuvre夫妻の動静は*Japan Times*には見られないが、百合は、さらにもう1人の娘を上海で産んでいる。不慣れな上海での生活には多くの困難が伴ったが、この間にフランス語を習得したようだ。終戦を経て1946年1月、ようやく上海を出て、ヨーロッパへ向かった。イギリスで母の親戚との面会を果たしたあと、フランスに到着し、そこで新たな生活を始めた。

ところが、フランス軍人であった夫は、当時、フランス領であったインドシナに赴任することとなってしまった。そこで2～3年暮らしたが、独立運動の激化により状況が危なくなったため、1950年頃にフランスに再び帰国したという(ファーブル氏による)。

その後、1952年には夫Bernardとは離婚してしまう。『自伝』では、夫は一貫してCharlesという名前で書かれ、夫とは死別したことになっている。夫との関係や離婚については、書きづらかったのかもしれないが、そのあたりの事情はよくわからない。

4　パリでの活動

離婚する前の1950年頃、百合は、ジャーナリストとしての活動を再開する。その際の肩書きは、PANA通信社のパリ特派員というものであった。

PANA通信社とは、1949年に香港で宋徳和（Norman Soong）によって「アジアの、アジア人による、アジアのための通信社」として設立された通信社である。同社は1950年に東京・有楽町の朝日新聞本社ビルに支局を開設した(岩間 2017：1-2)。宋は、もともと中国の国民党系の通信社・中央通訊社の記者・東京支局長として、終戦直後から日本で取材活動を行っていたが、1949年に『上海イヴニング・ポスト』紙の編集主幹・呉嘉棠らとともにPANA通信社を設立した（岩間 2017：229-230)。この頃は、まだ海外に自由に取材に出られなかったので、日本の新聞社は、海外の情報を得るためにはAP、UP、INSなどの欧米系の通信社と並んで、PANA通信社と契約を結んだのである。

百合がPANAに所属したのには、兄・Johnの影響があったのであろう。というのは、JohnもPANA通信社に属していたからである（Pan-Aisa Newspaper Alliance 1958：361)。岩間優希のインタビューに対して、のちにPANA通信社の社長となった近藤幹雄は、1956年に、ゼネラル・マネージャーだったジョン田路と対立した結果、いったんは退社したというエピソードをあかしている(岩間 2017：79-80)。

「アジアの、アジア人による、アジアのための通信社」を標榜するPANA通信社からすれば、パリは活

動の範囲外であったかもしれないが、そうした経緯から百合はPANA通信社のパリ特派員という肩書きを得たものと思われる。

*Nippon Times*には、少なくとも二本の署名入りの記事が見られる（*Nippon Times* 1952年5月4日、同8月3日）。その後、百合は読売新聞社にも寄稿している。1955年に編まれた『読売新聞八十年史』によると、1954年7月現在の同社のパリ支局として、「嬉野満洲男（論説委員）」の下に、「嘱託　高田博厚　同　田路百合子」という記載が見られる（読売新聞社社史編纂室編 1955:617）。また、この頃の『日本新聞年鑑』には各社の海外支局の一覧や氏名が掲載されているが、順に見ていくと、『昭和29年版』までは「田路百合子」の記載はないが（日本新聞協会編 1953）、『昭和30年度版』にはパリ支局の欄に、「嬉野満洲雄、高田博厚、田路百合子」（日本新聞協会編 1954:174）、『昭和31年度版』にも同様に「嬉野満洲雄、高田博厚、田路百合子」（日本新聞協会編 1955：178）、『1958年版』には「上野英夫　田路百合子」（日本新聞協会編 1958：114、554）という記載がある。

実際、『読売新聞』の紙面を見ると、以下の記事に「田路通信員」、「田路支局員」といった署名のついたフランスからの記事が見られる。

・「婦人帽の選び方　短い髪に小型が流行　日本人に茶色は不向き」（1953年3月12日）
・「嘆きのロシア・バレエ団　パリっ子の切望空しく　政治はついに踊らせず」（1954年5月21日）
・「ディオールのHラインをめぐって　パリ通信と受入れ方　人気はもう下火」（1954年8月29日）
・「人口不足のフランス　小麦、ブドウ酒から石炭まで　ありあまって物価高」（1954年12月3日）
・「[こだま]」（1955年4月25日）
・「パリに吹く電撃課税　“脱税の名人”もたじろぐ」（1956年7月26日）
・「海外の話題　フランス　“花のパリ”も住みにくい」（1957年5月2日）
・「決闘　スト　脚線美　パリの春　血を見た芸術の争い／フランス」（1958年4月10日）

これらからわかるように、百合が書いたものは、ファッションやパリの町の話題といった、いわゆるソフトニュースが中心であった。

このうち、パリの住宅事情を扱った記事の中では、以下のように書いている。

> この間記者（田路）は追い立てをくった。毎日周旋屋めぐりをしたのだが家賃の高いのにギョッとさせられるのがオチだった。室が気に入れば、家主の方で文句をつけて断られた。いわく、新聞記者は「評判が悪い」いわく「東洋人」には貸したくない等々。子持ちだといえばまずたいていどこでも断られた。それでも幸いに家主の親類を知っている友達を持っている友達がいたので、その紹介でどうやら住み家にありつけた。しかし最近はパリでも親日熱がようやく高まってきたので、記者一家と家主との仲がまずまず良くなってきたのは有難いことだ。（『読売新聞』1957年5月2日）

これを読むと、子どもを抱えた百合が、東洋人に対する差別に抗しながら、パリの地で悪戦苦闘している様子がしのばれる。

5　堀口瑞典との出会いと再婚

時間は数年さかのぼることになるが、百合は、堀口瑞典(よしのり)(ロバート堀口)と出会い、再婚している。そこで、堀口瑞典の履歴を簡単に見ておきたい。

堀口瑞典は、1909年2月、スウェーデンのストックホルムで生まれた。父は久萬一、母はベルギー人のスチナである。年の離れた異母兄に詩人として有名な堀口大學、姉に花枝と岩がいた(堀口 1987)。父の久萬一は外交官で、赴任先でスナチと出会い、結婚したのである(柏倉 2008)。ちなみに「瑞典」とは珍しい名であるが、これはやはり父の任地で、瑞典の生まれたスウェーデンの漢字表記に由来する。

父は、その後もメキシコ、スペインに赴任したため、瑞典も日本よりも海外での生活が長かったという。ミズーリ大学に進み、1932年6月、修士号を取って日本に帰国すると、*Japan Advertiser*に入社した。松岡洋右の代表団に随行した後、新聞聯合に入社し、1934年4月に上海に赴任する。また、同年10月にはミズーリ大学時代のクラスメートであったカリン・ブロエメルシークと結婚する。しかし、戦争が二人を引き裂いてしまう。カリンはアメリカに帰国する一方、瑞典はヨーロッパに渡り、帰国できないまま、スイスで終戦を迎えたのである(堀口 1933、通信社史刊行会編 1958、鳥居 2018a、2018b、2019)。

終戦後、瑞典はいったんは共同通信に入社したものの、数ヶ月で退社し、アメリカのINS（International News Service）の東京支社に移った。そして、1953年6月に行われる英国のエリザベス女王の戴冠式に出席する明仁皇太子に同行取材することとなり、ハワイ、アメリカ、カナダを経由し、英国へと渡った[7)]。そこで出会ったのが、やはり戴冠式の取材に来ていた百合であった(鳥居 2019)。

『自伝』には、二人のなれそめどころか、瑞典ないしはロバートの名前すら出てこないので、詳細はわからない。しかし、瑞典と百合は、ともに国際結婚した両親から生まれ、最初の結婚も国際結婚であった。こうした似たような境遇で生まれ育ったことが、二人を引き寄せていったのかもしれない。

瑞典の勤務先のINSは、1958年にUP（United Press）に吸収合併され、UPI（United Press International）となったが、瑞典はその頃、産経新聞のパリ特派員となった。『日本新聞年鑑 1959年版』には、『産経新聞』パリ支局の欄に、「ロバート・堀口」の名があり(日本新聞協会編 1959：100)、翌『1960年版』にも「Robert 堀口」と記載されている(日本新聞協会編 1960：622)。なお、この2つの版には「田路百合子」の名は見られないが、その頃、百合も産経新聞に移ったようである。こうして二人は、パリの地で新生活を開始したのである。

当時の文献には、二人のパリでの様子を断片的にスケッチしたものがある。

一つは、大阪読売新聞社の取締役・論説委員長だった三浦薫雄が書いたものである。彼は、1955年4月から6月にかけて渡欧するが(『読売新聞』1955年4月13日、同6月30日)、その時の様子をエッセイに著している。その中に、パリ滞在中の帽子のエピソードの様子として、以下のように記している。

> いや、ありていに白状すると、ぼくもぼうしに似たものをしばらくかぶった。パリはシャンゼリゼー大通りの然るべき男帽子屋へいって、おみやげ用のベレ帽をかった時である。ぼくもその一つをおのれの長い頭にのっけて見た。すると案内役の田路ゆり子女史こと堀口夫人(パリ支局嘱託)が「似合う、似合う、

かわいらしいワ」なんてお世辞をいったもんで……ついウカウカと、パリからスイス、イタリアの旅をベレ帽でのし歩いた。（三浦 1956：91）

新聞社の幹部がパリを訪れた際に、支局員が案内をするのは、当時としては当たり前のことであったのであろう。

もう一つは、小説家の丸岡明が、『三田文学』誌上に書いたものである。彼は、1954年にヴェニスでの公演のため日本能楽団の一員として渡欧した際の様子を「渡欧日記」として連載しているが、その中に、以下のような文章がある。

八月二十五日

読売支局にゆく。マダム・タジがひとりゐた。先年はホテル・ニコロで暫らく一緒だった嬉野氏も、ぢきに現はれた。今は家族連れでの、滞在だと云ふことであった。タジさんが、堀口瑞典君と結婚したことは今度パリに来て初めて知ったが、全く別々に知ってゐたこの二人が、一緒だという云ふことは、なにやらひどく目出度い気がした。

瑞典君も同じ社屋に部屋のあるアメリカの新聞社で働いてゐるさうで、タジさんに呼ばれて、読売の部屋に来た。（丸岡 1955：37）

この頃は、まだ瑞典はINS、百合は読売に勤めていたが、同じ建物内に事務所があったということである。ただ、丸岡にとっては、瑞典だけでなく、百合とも旧知の仲であり、「マダム・タジ」と親しみを込めて読んでいる点は驚きである。なお、丸岡は1957年の能のパリ公演の際にも、百合と再会している（丸岡 1959：199）[8)]。

日本人が自由に海外渡航できるようになるのは1964年4月1日からであり、それ以前は、仕事や留学など限られた目的でしか渡航はできなかった。そうした時期に、特に文化人などが渡航する場合、日本の新聞社等の現地支局に立ち寄る場合が少なくなかったようであり、百合は、その界隈では名の知れた存在あったようだ。

百合が、『読売新聞』から『産経新聞』に移ったのは1958年頃と思われるが、その頃、百合は映画雑誌『映画ストーリー』にも寄稿している。一つは女優のブリジット・バルドー、もう一つも女優のジャクリーヌ・ササールのインタビュー記事である。このうち前者については、「筆者はPANA通信特派員」と書かれているが、後者は「在パリ」とだけ記されている（田路 1958, 1959）。したがって、この頃においても引き続き、PANA通信社と関係があったことがわかる。

ここまで見てきたように、百合が書いたものにはファッションや映画などソフトなものがほとんどであったが、そうした中で例外と言えるのは、ナチスドイツ政権下でユダヤ人殺害に関与したとされるアドルフ・アイヒマンの裁判の傍聴記である[9)]。アイヒマンは第二次世界大戦後、逃亡を図っていたが、1960年5月に拘束され、その裁判が1961年4月11日にエルサレムで始まった。その様子をエルサレムから報告したのがこの記事である。この中で、彼女は、アイヒマンについて600万人のユダヤ人殺害に関

与した人物としては「あまりに平凡な男」などと評している（田路 1961）。なおこの時の百合の肩書きは「産経新聞イスラエル特派員」となっている。

6　日本への帰国と終焉

この傍聴記を執筆したあと、夫妻は日本へ帰国したようである。冒頭に引用した百合の略歴には「1961年に帰国。1962～64年に*The East Magazine*の副編集長」とある。ただ、この雑誌については今までのところ、よくわからない。瑞典は、1963年8月に日本IBMに入社、広報部長となった。68年5月から取締役になり、70年の大阪万博ではIBM館の館長を務めた（鳥居 2019：41）。

帰国した百合は、1964年7月に『実業の日本』の「ヨーロッパ並みの暮しのできる日」という座談会に出席している。他の出席者は、J・B・カニンガム（ロンドン・エコノミスト・コレスポンデント）、吉野俊彦（日銀調査局次長）、林雄二郎（経済企画庁参事官）、小島健司（総評調査部長）である。こうした錚々たるメンバーの中で、百合には肩書きはなく「在フランス十八年、一年半前帰国」と紹介されている。なお、この時は当時の日本の習慣に従ったのか、「堀口ゆり子」という夫の姓を用いている。百合は、物価の問題等について発言している。実際にフランスに長く生活したからこその実感に基づいた内容である（「特集 ヨーロッパ並みの暮しのできる日」『実業の日本』67(13)(1575)、実業之日本社、1964年7月）。

その後は、サイマルインターナショナルで通訳の仕事をしていたが、これも冒頭で紹介したように1971年頃からは、Guest Columnistとして*Japan Times*（*Nippon Times*からの復題）に時折寄稿している。瑞典も、1974年2月に日本IBMを退職した後は、フリーのジャーナリストとして、*International Herald Tribune*や*Japan Times*に寄稿した（鳥居 2019：41）。

こうして日本での生活を営んできた二人であるが、終の棲家に選んだのはフランスであった。瑞典が肺気腫におかされると、百合とBernardの間にできた娘の夫が開業した病院のあるフランス北部のリール（Lille）に移り、瑞典はその地で1991年1月19日に、81歳で亡くなった（鳥居 2019：41、*Japan Times* 1991年1月25日）。そして百合は2000年10月30日にリールにほど近い、ルーベ（Roubaix）の老人ホームにて、80年の波乱に満ちた生涯を終えたのである（ファーブル氏による）。

おわりに

瑞典もそうであるが、百合の人生は、漂泊者のそれであったように思える。百合は、その生涯において日本、台湾、上海、インドシナ、そしてフランスに居住した経験を持つ。彼女が自らの意志で進んでそれらの地を選んだわけではない。戦争を含む様々な要因が、彼女にそれを強いたのである。まさしく、戦争に翻弄された人生であった。

その生涯を見ると、国際結婚した両親の元で、多言語多文化な環境で育ったことが、その生涯を運命づけたということができる。それは時に偏見のまなざしを受け、差別の対象ともなった。特に戦争という、愛国心が高揚し、国家への忠誠が求められる環境下においては、苛烈なものであったことは想像に難く

ない。百合が、一回目の結婚を機に、逃げ出すように日本を出国したことはそれを如実に物語っている。しかし、新婚生活を送った上海も決して居心地の良い地ではなかっただろう。

しかし、生きる術となったのも多言語多文化な環境で、英語、日本語、さらにはフランス語を習得したことであった。日本国内では英字紙の仕事、台湾で英語アナウンサーの仕事を得て、戦後も終始、英語を駆使する仕事に従事したからである。

百合は、戦後間もない時期に、女性として海外に特派員として駐在していた。それは当時としては大変珍しく、先駆的な存在であったと言える。しかし、その生涯を見ると、彼女が必ずしも進んでジャーナリストになろうとしたのではなかったのではないかとも思える。彼女が書いた記事を見ても、政治や経済から世界情勢を大上段から論じるような、いわば大文字のジャーナリズムではない。むしろ、ファッションや映画をはじめ、フランスの実生活を垣間見させるようなものがほとんどである。

戦後すぐには自前の記者を特派員として出せる余裕がなかった日本の新聞社や通信社にとって、すでにフランスに在住している百合のような存在は、即戦力として有効であったのであろう。そして、終戦からおよそ10年が経った1950年代中頃になると、日本人によっても欧米の実際の生活の様子を知りたいという興味や憧れも生まれていたのであろう。一生活者としての等身大の視点から書かれた百合の記事はそういったニーズに応えるものであったということができる。そして、おそらくジャーナリズムは、有名なジャーナリストによってのみ作られるわけではなく、多くの人びとによって紡がれたものであるということができよう。

注

1）これらについては、国立公文書館アジア歴史資料センターのサイトにおいて閲覧可能である。https://www.jacar.go.jp/

2）ここでは、スタンフォード大学フーバー研究所の「邦字新聞デジタル・コレクション」（Hoji Shinbun Digital Collection, Hoover Institution Library & Archives, Stanford University）を用いた。https://hojishinbun.hoover.org/en/newspapers/jan19211107-01.1.4

3）なお、『自伝』には記載がないが、この当時、兄のJohnもJapan Advertiserに在籍していた（Pan-Aisa Newspaper Alliance 1958：361）

4）ただし、興南新聞社編 1943：208の「鈴木源吾」の項では、妻は秀と記されている。

5）この記事においては、母の名前はElizabethと記されている。

6）なお、写真はないものの同様の内容が、同紙の6月10日にも再掲されている。また、同6月8日、6月11日にも上海への出発に関する消息が掲載されている

7）このとき、*Nippon Times*（*Japan Times*の改題）にはRobert Horiguchiの署名がある記事が、各地からいくつも掲載されている。また、INSと関係の深かった『読売新聞』にも、例えば「【ホノルル特電（INS）六日発】（ロバート・堀口記）」（『読売新聞』1953年4月7日）のようにクレジットが表記されている記事が散見される。また、『婦人生活』1953年7月号には、「現地特派座談会　戴冠式とロンドンの皇太子殿下」という座談会の模様が掲載されているが、読売新聞、東京新聞、産業経済新聞の記者とともに、「ロバート・堀口（I・N・S特派員）」も出席し発言している（『婦

人生活』7(8)、婦人生活社、1953年7月)。

8）なお、1956年にインド、ヨーロッパ、ソビエト、中国等を歴訪した演劇評論家の尾崎宏次も、パリで堀口夫妻に会った旨を記している(尾崎 1957：119)

9）アイヒマン裁判は、世界的に注目を集め、ハンナ・アーレントをはじめ多くの傍聴記や記録が著されている(アーレント 1969)。ちなみに権威者に服従する心理を明らかにするために心理学者ミルグラムが行った「アイヒマン実験」の名称は、これに由来している(ミルグラム 1975)。

参考文献

ハンナ・アーレント(大久保和郎訳)，1969,『イェルサレムのアイヒマン　悪の陳腐さについての報告』みすず書房(新版『エルサレムのアイヒマン　悪の陳腐さについての報告』みすず書房，2017年)

堀口瑞典，1933,「カレッヂライフの思ひ出　アメリカ　ミズーリ大學」『婦人之友』27(10)，婦人之友社

堀口瑞典，1987,「母スチナのことなど」『想い出の堀口大學(別冊かまくら春秋)』かまくら春秋社

井川充雄，2019,「アジア・南方への拠点としての台湾放送協会」『メディア史研究』45号，メディア史研究会

井川充雄，2022,『帝国をつなぐ〈声〉日本植民地時代の台湾ラジオ』ミネルヴァ書房

岩間優希，2017,『PANA通信社と戦後日本　汎アジア・メディアを創ったジャーナリストたち』人文書院

柏倉康夫，2008,『敗れし國の秋のはて　評伝堀口九萬一』左右社

興南新聞社編，1943,『臺灣人士鑑』台北：興南新聞社

丸岡明，1955,「渡欧日記(IV)」三田文学編集部編『三田文学』[第2期]45(4)（のち，丸岡明『日本の能』ダヴィッド社，1957年に所収）

丸岡明，1959,『能談義』東西五月社

スタンレー・ミルグラム(岸田秀訳)，1975,『服従の心理　アイヒマン実験』河出書房新社

三浦薫雄，1956,『西欧・見る聞く食う』読売新聞社

日本船舶海洋工学会，1940,「故正員田路坦君の略歴」『造船協会雑纂』215 (0)

日本新聞協会編，1953,『日本新聞年鑑 昭和29年度版』日本新聞協会

日本新聞協会編，1954,『日本新聞年鑑 昭和30年度版』日本新聞協会

日本新聞協会編，1955,『日本新聞年鑑 昭和31年度版』日本新聞協会

日本新聞協会編，1958,『日本新聞年鑑 1958年版』日本新聞協会

日本新聞協会編，1959,『日本新聞年鑑 1959年版』日本新聞協会

日本新聞協会編，1960,『日本新聞年鑑 1960年版』日本新聞協会

尾崎宏次，1957,『演劇はどこにある』三芽書房

Pan-Aisa Newspaper Alliance，1958，The Asia who's who 1958，Hong Kong : Pan-Aisa Newspaper Alliance

島田謹二，1974,「アランデル・デル・レー氏追憶」『英語青年』研究社

田路百合，1958,「特別読物　ブリジット･バルドーとの一時間」『映画ストーリー』7(11)(85)，雄鶏社

田路百合，1959,「グラビア　ジャクリーヌ･ササール訪問」『映画ストーリー』8(2)(90)，雄鶏社

田路ユリ，1961,「〝ガラス箱〟の中の男　アイヒマン裁判の裏側」『週刊サンケイ』(499)1961年5月8日号，扶桑社

竹下修子，2000,『国際結婚の社会学』学文社

鳥居英晴，2018a,「堀口瑞典とその兄大學(上)　ベルギー人を母に持った同盟通信記者」『メディア展望』(683)，新聞通信調査会

鳥居英晴，2018b,「堀口瑞典とその兄大學(中)　ベルギー人を母に持った同盟通信記者」『メディア展望』(684)，新聞通信調査会

鳥居英晴，2019,「堀口瑞典とその兄大學（下）　ベルギー人を母に持った同盟通信記者」『メディア展望』(685)，新聞通信調査会

通信社史刊行会編，1958,『通信社史』通信社史刊行会

読売新聞社社史編纂室編，1955,『読売新聞八十年史』読売新聞社

嘉本伊都子，2001,『国際結婚の誕生〈文明国日本〉への道』新曜社

嘉本伊都子，2008,『国際結婚論！？　歴史編』法律文化社

付記

本稿の執筆に際して，秋山光文氏(目黒区芸術文化振興財団理事長)，オリビエ・ファーブル(Olivier Fabre)氏(元・ロイター通信記者)から多大なるご協力を頂いたことに深く感謝申し上げる。

史料からの引用に際しては，人名を除いて，旧字は新字に改めた。拗音・促音は，適宜，小書き仮名に改めた。漢字カタカナまじり文のカタカナはひらがなに改めた。そのほか，適宜，句読点を補ったところがある。

なお，本研究はJSPS科研費 JP 19K02141の助成を受けたものです。